

国連人口基金  
(UNFPA)  
ラファエル・M.サラス記念講演

“Challenges for Sustainable Development in a New Era:  
Population, Climate Change and Global Security”  
新しい時代における持続可能な開発への挑戦  
—人口、気候変動、地球の安全保障—

福田康夫

衆議院議員  
日本国元総理大臣  
人口と開発に関するアジア議員フォーラム議長  
国際人口問題議員懇談会 会長  
財団法人アジア人口・開発協会 理事長

配布版  
(部内限)

2009年11月23日

アメリカ合衆国  
ニューヨーク市  
国際連合本部

## 1. はじめに：感謝の言葉

このたびは、歴史あるラファエル・M・サラス・レクチャーにご招待いただき、心より感謝いたします。UNFPA のオベイド事務局長、ナフィス・サディック前事務局長をはじめ、古くからの友人の顔が見えますが、皆さまのご尽力に感謝申し上げます。

ラファエル・M・サラス氏は、UNFPA 初代事務局長として、UNFPA の基礎を築かれました。またサラス氏は、岸信介・元総理大臣と私の父であります福田赳夫・元総理大臣らとともに、人口問題に関わる国会議員活動を創始しました。その意味で私自身もサラス事務局長及び UNFPA と古くからの関わりがあると言えると思います。

このサラス・レクチャーを引き受けるにあたって、JPFP 創設期そして APDA の創設期の古い写真を見る機会がありました。サラス事務局長が、私どもの活動に積極的にご参加いただいていたことがよく分かりますとともに、当時の熱気を思い出し、たいへん懐かしい思いがいたしました。

## 2. 人口問題と国会議員活動

### ①人口と開発に関する国会議員活動の背景

最初に、人口問題の解決に、国会議員がなぜ関わるようになったかについて、お話をしたいと思います。

1969 年、UNFPA が設立された当時、世界の人口は急激な増加を続けていました。また、多くの途上国は「口は一つだが、手は二つ」、「人口こそが国力である」として人口増加を肯定的に捉え、そのこと自体が問題であるという認識は乏しかったといえます。

1974 年に世界人口会議がルーマニアのブカレストで開催されましたが、多くの途上国が人口プログラムに消極的であったことをご記憶の方も多いと思います。この人口問題を進展させるうえで、UNFPA が果たした役割は、まさしく主導的なものであったといえます。サラス事務局長を初めとした UNFPA の職員が各国を訪問し、行政に働きかけを行うと同時に宗教指導者や政治家とも積極的にかかわり、人口問題の意味を説きました。サラス事務局長を初めとする UNFPA の一人ひとりの熱意と使命感がなければ、地球の未来はなかったと思います。

このような社会的な環境の下で、1974 年に、アメリカ陸軍省次官を務めたドレーパー将軍やサラス氏のご尽力もあり、世界で初めての人口問題に関する超党派の国会議員グループである国際人口問題議員懇談会 (JPFP) が、設立されました。これは人口問題に対するコンセンサスが形成されていなかった当時の状況を見れば、まさしく画期的な出来事でした。

## ② 日本における経験

この背景には、世界の人口問題を解決することなく、人類の持続可能な開発はないという信念と、非西欧で初めて人口転換を成し遂げた日本の経験を開発途上国に移転する必要があるという確信がありました。

皆さま、ご存じのとおり、非西欧で初めて人口転換をなし遂げた国が日本です。しかも、欧米が歴史的に経験した人口転換よりもはるかに急激にそれは進展しました。この急速な人口転換の進展を見て、当時、欧米の人口学者は、奇跡でなければ、統計上の誤りではないかと言ったといえます。この日本の経験が、現在世界各国で実施されている人口政策を可能にする大きな転換点を切り開いたので

## ③ 閉じた世界としての地球という認識

また、このころ、世界的に地球環境問題が識者の間で話題となりつつありました。1963年にアメリカの建築家・思想家、バックミンスター・フラワーによって「宇宙船地球号」という言葉が提唱されたのをきっかけに、経済学者ケネス・ポールディングが、この概念を経済学に適用し、これまでのような地球環境を無限のものと考えて構築されてきた経済学ではなく、地球を一つの閉鎖した生態系としてとらえた経済システムを構築する必要がある、と呼び掛けました。

さらに 1968年にはポール・アーリックが『人口爆弾』を著し、人口問題が地球環境に決定的な影響を与えることを広く訴えました。その後、1972年にはローマクラブの『成長の限界』が発表され、人口増加や資源枯渇の問題に科学的な立場から警鐘が鳴らされ、この時期に現在の環境問題や人口問題に対する取り組みの基本的な理念が生み出されてきたのです。

## ④ 人口爆弾と核爆弾

当時、福田赳夫がよく口癖のように言っていた言葉があります。それは「人類の未来を明るくものとするためには核爆弾と人口爆弾の爆発を止めなければならない」というものです。現在、世界最大の核保有国であるアメリカのオバマ大統領が核軍縮に真剣に取り組まれていることは、まさしく地球規模での安全保障を構築するための、非常に重要な一歩を踏み出したものと高く評価したいと思えます。

地球という限られた生態系を考えれば、人口の増加は環境や貧困問題など、現在地球規模的な課題といわれている問題の基礎であり、人類の安全保障に大きな影響を与えます。当時の人口増加率で人口が増加すれば、2050年の世界人口は175億人に達すると予測されていました。そしてその急増する人口は極端な貧困を生んでいました。

## ⑤ JPFPP の設立と日本の経験の移転

このような中、JPFPP 設立前夜 1973年に日本の議員団がインド、タイ、インドネシア、フィリピンを視察しました。その時まさに路傍で産まれ、飢えて死んでいく何の罪もない子どもたちを見て、大きな衝撃を受けました。

日本の国会議員たちは、人口問題は強制的な人口抑制で解決できる問題ではなく、一人ひとりの生活の改善や、幸福な生活がその基盤になければならないということから認識していました。この点は人口問題への対処の歴史を考える上で、特筆すべき点であったと考えております。

その背景には、日本の経験があります。第二次世界大戦に破れた日本は廃墟の中から立ち上がり、経済復興を成し遂げました。そのなかで、農村の改善が急務となり生活改善を中心とした新生活運動が導入されました。新生活運動は 1955 年、当時の鳩山一郎総理大臣、現在の鳩山由紀夫総理大臣の祖父に当たる方です、がその普及に努力した活動です。これは健康の面と経済的な面で女性の地位の改善を行うことで、出生転換に影響を与え、「貧乏人の子たくさん」といわれる状況を改善しました。

このような経験を経てきた日本の国会議員が、人口増加に苦しむアジアの切迫した状況を見て、人口問題に対する国会議員活動の理念として、「飢えて死ぬためだけに産まれてくる子どもがあってはならない」という言葉が生まれました。そしてそれを達成するための手段としては、一人ひとりの人間の健康や生活の改善が当初から前提とされていたのです。これは現在 MDGs の主要テーマである貧困の撲滅と国際人口開発会議行動計画の理念そのものでもあります。

そしてこれは、人口と開発に関する国会議員活動を創始した、サラス事務局長や国会議員たちの理念が正しかったことを示すものです。今からおよそ 35 年前に UNFPA のサラス事務局長との連携のもとで、日本の国会議員がこのような理念を世界に先駆けて発信できたのです。

### 3. 国際的なネットワークの構築

1974 年に JFPF が設立されてから、この日本の経験を途上国に移転するために、各国に人口・開発に関する国会議員グループを設立し、さらに各国の経験を相互に交流するために国会議員活動のプラットフォームを構築する必要が生まれました。

1981 年に人口と開発に関するアジア議員フォーラム (AFPPD) の設立が決議され、1982 年には世界委員会 (GCPPD) が、その後アメリカ地域人口・開発議員グループ (IAPG) が設立されました。さらに、1994 年の国際人口開発会議 (ICPD) を契機として、1997 年にはアフリカ・アラブ議員フォーラム (FAAPPD)、2000 年にはヨーロッパ地域議員フォーラム (EPF) が発足しました。

現在、世界中すべての地域に議員フォーラムが設立され、各国の人口と開発に関する国会議員活動のプラットフォームとしての役割を果たしています。

#### 4. 複雑化する現代の人口問題と環境問題

##### ① 現代における人口の課題

いま 21 世紀に至り、人口問題は、その取り組みが成果をもたらした結果として、かつて 1960 年代や 70 年代のように激増する人口をいかに抑制するかという問題から、人口と環境、都市への人口集積、高齢化、少子化など各国ごとに異なる多様な課題にいかに対応していくかという問題に変化してきました。人口問題が複雑化する中で、かつてのような人権にあまり配慮しないで、人口抑制だけを行うという一律の取り組みは許されなくなりました。

それと同時に、グローバル化の進展の中で、その複雑な課題は世界全体の課題であり、すべての人が取り組まなければならない問題となりました。そして誰もその影響から逃れることができなくなりました。

ブッタに有名な「毒矢のたとえ」という説話があります。簡単に言えば、毒矢を射られた人が、“だれが撃ったのか”、“その毒矢はなんでできているのか”などを問うている間に、毒がまわって死んでしまったというものです。そこでなすべきことは、早く毒矢を引き抜き、毒を洗い流し、傷口を治療することです。

##### ② 現代における開発課題—気候変動と人口

2008 年、私が総理大臣在任中、2つの大きな国際会議を日本で開催しました。一つは第 4 回アフリカ開発会議（TICAD IV）で、アフリカが開発の果実を享受するためには、人口問題が喫緊の課題であることを国際的にアピールしました。二つ目は、G8 北海道洞爺湖サミットで、そこではミレニアム開発目標 4「乳幼児死亡率の削減」および目標 5「妊産婦の健康の改善」、また保健システム強化の重要性について、国際的な共通認識が形成されました。同時に、G8 サミットでは、人口問題と気候変動の問題の関連性も議論されました。今後人類が直面する課題を考えたとき、人口が増加する中で、淡水資源の逼迫と食料安全保障の問題、環境の問題などへの対応が切実な課題となります。

##### ③ 環境問題の基礎としての人口

本年 12 月にコペンハーゲンで開催される COP15 に向けて、現在、環境問題に対する熱心な議論が、世界各国で行われています。しかしながら、それらの議論のほとんどは、技術改善による環境負荷の緩和策の議論もしくは、排出権取引など市場を通じた最適化の議論です。気候変動の議論の中に、この地球で生活する主体である人口の問題が、あまり扱われていないことは、残念なことです。環境インパクト (I) が人口 (P)、豊かさ (A) そして技術 (T) の積であることを示す、有名な公式  $I=PAT$  を見てもわかるように、人口の安定化なくして、持続可能な開発の達成はあり得ません。

このことは周知の事実であるにもかかわらず、気候変動の問題を扱うときに、人口問題を十分に考慮した、対策が取られているとは言えないと思います。

一人ひとりの命こそ、私たちが守るべきものです。人口問題に対する対処を的確に行うことで、限られた環境条件の中で、人類の生存を確保すると共に、一人ひ

とりの人間らしい生活を守り、人間として尊厳のある生活を実現することが可能になるのです。そのためには、現在 UNFPA が中心となって取り組まれている、「すべての人がリプロダクティブヘルスを利用できるようになる」という、ミクロの視点とともに、地球という限られた生態系のなかで、どのように持続可能な開発を進めていくか、というマクロの視点の両方が不可欠です。このことは、ICPD の「序文」や「原則」に明記されていることでもあり、また「UNFPA 世界人口白書 2009 年版」で、オベイド事務局長が述べられている所でもあります。

環境問題に国境はありません。人類の未来を考え、今後の気候変動が貧しい人々に与える影響を考えたときには、人口問題への対処と気候変動への「適応策」を同時に行う必要があると考えます。特に貧しい人たちの知識や技術の向上を果たすことで、地域の資源や環境を活かし、気候変動への「適応」能力を構築することが不可欠になると思います。このような取り組みを実現するためには、各国政府の連携と共に国連においても各専門機関が、それぞれの分野だけで活動するのではなく、分野横断的に専門機関の壁を越えた包括的かつ統合的な取り組みが必要となるでしょう。

#### ④ UNFPA への期待

現在国連が「一つの国連 (One UN)」を合言葉に改革を進められていることは、人類の将来を希望のあるものとするための、取り組みであろうと思います。

そして UNFPA には、人口と持続可能な開発への取り組みを強化していただき、総合的な対処を行う上で、中心的な役割を担って頂きたいと強く念願いたしております。日本は ODA の基本方針として人間の安全保障を掲げています。一人ひとりの命が守られ、尊厳が保たれることが安全保障の基盤です。

この人間の安全保障を追求することで、一人ひとりの命が守られる社会を構築することは、世界の安全保障の本当の意味での基盤となるものなのです。人口を持続可能な開発の文脈に位置付け、人が尊厳を持って生きてくことができる社会を構築するために、ありとあらゆる知恵、そして技術、資金を動員していく必要があると思います。

### 5. 結びに：希望ある未来を構築するために

#### ① 人口問題解決に向けた議員活動のこれから

現在、これまでの努力が実り、世界すべての地域に国会議員フォーラムが形成され、積極的な活動を続けています。国会議員が関わることで草の根の意見を直接国際社会に反映させ、貧しい人々の声を政策に反映させてきました。

そして今、人口と開発に関する国会議員活動は、各国における国民の福利の達成、民主化とグッドガバナンス、さらに地球の安全保障として一人ひとりの尊厳が守られる社会を構築するために、ますます重要なものとなると考えております。その具体的な活動の一歩として、現在、私が理事長を務め、JPFP の事務局を担っ

ている APDA では、国会議員のネットワークと人口と開発に関する各国の国内委員会の能力を強化することで、「人口分野における ODA の透明性、説明責任を向上させ、国民のための ODA を実現する」という意欲的な取り組みを始めました。

## ② サラス氏の夢

国連機関における国会議員との連携は UNFPA から始まりました。その成果をもとに、現在では、ほとんどすべての国連専門機関が国会議員との連携を行っております。しかし、人口問題と国会議員との関わりほど本質的な重要性を持つ分野はほかにはありません。UNFPA を創始し、国会議員活動を支援した、サラス氏たちの視点はこのような将来を見据えたものであったと思います。

サラス氏は大変な親日家であると同時に、日本文化に対する深い造詣を身につけていました。例えば能役者の示す小さな立ち居振る舞いや、扇の動きでこれから向かう遠い先の方向を示し、役者が踏み出す白足袋の小さな一歩が何百マイルの距離を示すという抽象化された形式美をよく理解されていました。

またその芸術的才能は「俳句」の世界に生かされ、早稲田大学の佐藤和雄先生のよき弟子として二冊の英語句集「五十六の石」(Fifty-Six Stones) と「足跡」(Footprints) を遺しておられます。

佐藤先生は「足跡」序文の中で、福田赳夫がサラス氏の句集出版を喜び、「私もサラス氏の俳句の弟子になりたい」と冗談めかして申し出たこと、「日本のマーガレット・サンガー」と呼ばれた故加藤シズエ女史が「俳聖・松尾芭蕉がなくなって 300 年になるが、今頃芭蕉は国連高官の中にお弟子が出てきたことに感激しているに違いない」と述べたと報告しています。

シェイクスピアの世界は劇場でしたが、松尾芭蕉の世界は旅と句作の世界でした。サラス氏もまた偉大な旅人でした。サラス氏はジェット機に乗って 250 万マイルの旅をしましたが、これは地球を 100 回廻ったことに匹敵します。

Afghanistan to Zimbabwe, Each mission thins soles of the soft shoes.

というサラス氏の句を諳んじながら、私はアルファベットの A から Z まで、つまり世界中の国々を人口問題の解決を目指して靴が擦り切れるほどまでに旅して廻ったサラス氏の面影をしのび、その貢献の大きさを今更ながら深く心に刻んでおります。

## ③ 終わりに

人類の未来を希望あるものとするために、今後も人口と開発に関する国会議員活動を活性化していきたいと考えております。

新しい時代における真の地球規模での安全保障の確保、という目標を達成するためには、人口と持続可能な開発に関する国会議員活動と、これまで世界の人口分野で指導的な役割を果たしてきた UNFPA が、それぞれの特性を活かし、同じ

目的のために手を携えて、共に努力することが不可欠であると確信します。

人口問題の原点を見据え、人類の持続可能な未来を構築するための人口問題という視点に立ち戻り、共に努力を続けていきたいと思えます。

ご静聴ありがとうございました。